

M2 杉山一郎  
M1 梅津泰宏

## 5 月第 4 ゼミ報告

### I 事務報告

#### 1. 日時

2012 年 5 月 27 日(日) 13:10~17:30

#### 2. 場所

東京文京学習センター 2 階第 1 演習室

#### 3. 出席者

小倉先生

M2 杉山 1 人、M1 梅津 1 人、学部生 藤原 他ゼミ学部生 佐藤 2 人 (学生の敬称は略) 小計 4 人。なお、M1 安原さんが 16 時 40 分から参加 合計 6 人

#### 4. 本日のスケジュール

13:00~14:00	本日のオリエンテーション	
14:00~14:10	休憩	
14:10~15:10	4 月以降のゼミの流れの整理	杉山の司会
15:10~15:20	休憩	
15:20~16:10	学びと論文づくりをどうつなげるか	小倉先生の講義
16:10~16:20	休憩	
16:20~17:00	大量な情報を、時間をかけず、正確に読みとる方法	先生の講義
17:00~17:10	休憩	
17:10~17:30	まとめのグループ討議、一人一言	

### II ゼミ内容

はじめに

5 月第 4 小倉ゼミは、大きく 3 つの内容があった。第 1 は、ゼミの足並みを揃えるための 4 月以降のゼミ内容に関する整理である。ただ、これは前日の 5 月第 3 ゼミでも行っており、2 回目の検討として簡略化された扱いであった。

第 2 は、ゼミにおける学びと論文づくりをどうつなげるかの講義である。ここでは 6 月

のゼミテーマも意識する中で、論文の構成の問題にも若干ふれる内容があった。

第3は、大量な情報を短時間で正確に読みとるための講義である。今日のIT環境下では、大量な情報が流通するようになっている。そこで、多くの働く者にとって、仕事上の課題に関連し、大量な情報を短時間で正確に読みとることがもとめられてくる。これはどうしたら可能になるかの講義である。

なお、以下の報告では、講義内容をわかりやすく伝えるため、上の柱の順序は多少干入れ換えた。ゼミにおける講義のつながりがよくなる順で述べる。

## 1. 本日のオリエンテーションの内容紹介

小倉ゼミでは、各回ゼミの初めに先生からゼミオリエンテーションが行われる。これは当日のゼミ内容と主要トピックの位置づけを明らかにするためであり、授業において学生を受身にさせない手立ての一つである。以下は、その中からお知らせ的な内容部分を抜き出して紹介する。

### (1) Web会議開催のお知らせ

5月27日(日)、本日の20時より、Skypeを利用したWeb会議を開く。ここで、クラウドコンピューティングに関する資料の読み合わせを行う。IT関連業務に従事する杉山、白井、藤原、安原、布川などのゼミ生有志によるWeb会議である。読み合わせ対象資料は、小倉先生から提供を受けた。

Web会議開催の経緯は次のとおりである。すなわち、今期の小倉ゼミのメンバーは、遠隔地からのゼミ生が多い。そこで、第2ゼミ以降に出席できにくい彼らのため、Web上で勉強会を開こうという話しになった。共通の関心あるテーマで関連情報をやりとりし、通信教育では行にくいゼミ生相互のコミュニケーションを図ることに役立ていこうという主旨である。

### (2) 本日のゼミ内容の告知

続いて本日のゼミ内容の告知である。小倉ゼミでは、定例ゼミの場合、先生からゼミ生に対してゼミスケジュールがメーリングリストで事前に送付される。これは先生がゼミ生に準備をした状態でゼミに参加してほしいと願っているからである。つまり、通信教育で学生が遠く離れていると、ゼミを行う上で簡単なレベルの情報共有もなかなか満たされない。そこで、ゼミスケジュールを事前に学生の許へ送付することで、ゼミを行うための前提条件の一端は確保されることになる。ただし、第2ゼミ以降は、ゼミスケジュールを事前に送る時間的余裕がない。この場合は、ゼミの当日にゼミ生と相談しながらホワイトボードに書き込むかたちで、ゼミスケジュールを告知するようにしている。ともあれ、こうして提示された今回のゼミスケジュールは、次のとおりである。

- ①4月以降のゼミ(7回分)の流れを整理する
- ②構成の基本スキルを学ぶ
- ③大量な情報を、時間をかけず、正確に読みとる方法
- ④6月宿題の内容についての相談

## 2. ゼミにおける学び方 小倉先生の講義

次は、ゼミ内容を実体化していくため、ゼミにおける学びをどう生かすかという話題である。より具体的には、ゼミにおける学びをどう論文づくりに生かすかという問題である。これに関する小倉先生の講義内容を紹介する。

### (1) 大学における実質的な時間の流れ

大学における時間の流れは、カレンダーの時間と違う。大学における実質的な時間の流れは早い。このことに注意しなければならない。放送大学大学院の場合であっても同様である。というより、放送大学は通信教育のため、集合教育の必要性に関する共通的な理解は低いし、その開催頻度も多くはない。このため、一般大学や大学院に比べ、放送大学大学院の方が時間の進み方はもっと早いかもしれない。たとえば、4月のゼミに出ただけで、あとは5月も6月も欠席の学生がいたとする。彼に何の意識もなければ、7月に入ると周りにはもう十分に夏休みモードであり、1学期は終わりである。ここで次のように問われたらどうであろう。「この間、何を学んだのか。何を体得したのか。何ができるようになったのか。何かアウトプットは出せるのか。外で勝負できるものはあるか」ということである。これでも、内心忸怩たるものはないであろうか。

今日は、何事も変化が激しく、たしかなものは何一つないといってよい時代である。そうした中で、大学における時間の流れが早いことだけはたしかである。しかも、その時間の流れの早さを受身的に受けとめていると、あとは「重力の法則」に身を任せることになり、何もなし得ないまま落下するしかない。学ぶ上で成果を出そうとすると、それを常に掘り崩す方向で働くのがこうした力である。したがって、学生は通信教育に潜むこうした意味でのおそろしい現実をよくよく心得ねばならない。

### (2) ゼミでどう学ぶか

そこで、「重力の法則」に呑み込まれないようにするには、どうすればよいか。まずは学びに相応な成果を出そうとしなければならない。その上で、放送大学大学院のようなゼミで学ぶ場合の注意である。そこで成果を出すには、他と同じ通り一遍のことや外見だけのこと、見かけだけのことに終始しては駄目である。何より、早期に「ゼミの実体をつくる」「学びの実体をつくる」必要がある。

とはいえ、小倉ゼミの学びが、ゼミ生に対し身の丈を超えた特別なことを要求するわけではない。ただ、身の丈レベルでの成果を出すようにもとめるだけである。これは突き詰めていけば、ゼミ生に自己成長してほしいと願うからである。このため、足元レベルに焦点を置いた学びに絞り、そこで自分ができる限りの工夫を入れ込む。そして、身近なものの中から最大限活用できるものを見出し、そこに焦点をあてて学ぶことを勧める。

もう少し具体的にいうと、ゼミを活用するにはどうしたらよいか。これには、あまりに簡単すぎることのようにだが、ゼミに最大限出席することが出発点となる。次いで、そこで発表的な場面はむろんとして、先生との小さな応答を含めたやりとりが自分にとっての舞台であるにとらえることである。それにしても、なぜこのようなささやかなことを舞台に立つことになぞらえるのか。それはひとたび舞台に立った役者は、観客の反応を可能な限り勝ち取るのが使命となるからである。役者は、舞台において観客を自分の世界に巻き込み、自分の演技に没入させるのが仕事である。これができれば、彼にとって舞台に立つ

ことがかけがえのない喜びになる。つまり、役者は舞台に立つことで成長する。そこで、ゼミにおける自分の行動にこうしたことを応用していくのである。

しかし、ゼミにおける発表や小さなやりとりにも舞台に立つ役者と同様な覚悟をもとめるのは、大げさすぎると感じる向きがあるかもしれない。これについては、厳しい制約条件ばかりに取り囲まれている通信教育のゼミにおいて、どうしたら成果を出せるか考えてみればよい。そこでもし自分が伸びようとしたら、気持ちとしては、ここで述べたとおりの姿勢に立たないといけない。ゼミにおける一つ一つのやりとりや行動で、舞台に立って観客を酔わせる楽しみ、あるいは相手に伝えられる楽しみと喜びを味わおうとする。毎回のゼミには、これと同様なものを得ようとの意気込みで向かう。たしかに、通信教育のゼミでは、こうした姿勢がなければ、何一つ成果は期待しがたいであろう。

### (3) 4月からのゼミ運営で変えたこと

2012年の4月第2ゼミ以降は、ゼミ運営において、次のようなことを変えた。これにより、ゼミ内容は前年までと大きく違ってきている。これは、ゼミ生の基礎力を引き上げる上で大きな役割を果たす。ゼミ生は、ここに注目してほしい。

#### ①宿題の中身と出し方を変えた

宿題については、各回の宿題テーマを論文づくりのプロセスから選ぶようにした。また、ゼミ生にとって書きやすく、書いた宿題の内容が各回毎で積み上がるように留意する。このため、ゼミ生と相談した上で宿題の内容を決めている。さらに、宿題回答の手引きを作成し、宿題回答作業に取りくみやすくする。

#### ②ゼミ報告のつくり方を変えた

ゼミ内容の積み上げを図るには、ゼミ報告の作成が出発点となる。ゼミ報告により、ゼミ内容を記録化し、ゼミ全体に伝え、ゼミ内容に関する情報の共有化を図る。しかし、これの執筆をいきなり新入院生に担当させても、負担が大きすぎる。のみならず、能力的にも無理がある。そこで、こうした問題を解決するため、ゼミに最後まで残った全員にゼミ報告の素材提供メモを書いてもらうようにした。これを期限までにメーリングリストで送る。それをアンカーマン (**anchorman** 放送用語で全体司会、全体のとりまとめ役を指す) がまとめるかたちに変えた。このように、ゼミ生が協働作業により、ゼミ報告づくりに関与する。ここから、ゼミにとって、いろいろな効果が生まれてくる。第1は、ゼミ生にとって書く機会を圧倒的に増やした。これは書くためのいい訓練になる。第2は、多くのゼミ生が素材提供メモを出すことにより、ゼミ報告づくりのまとめ役の負担を大きく軽減した。

#### ③グループ討議の活用

5月以降のゼミでは、講義もそれだけで切り離さず、学生の司会によるグループ討議と組み合わせで行うようにした。このグループ討議を行うことにより、ゼミ生に少しでも消講義内容を消化してもらいたいからである。

### (4) 放送大学小倉ゼミのこれまでの歩み

小倉先生が放送大学にかかわってから、さほど長い時間が経過しているわけでもない。だが、ゼミは先輩を含む学生たちが行った活動の蓄積の上に成り立つものである。そこで、

ゼミ生は、この短い間で小倉ゼミがどう変わってきたか知っておく必要がある。そうでないと、学びの上での自分の客観的位置をつかめないからである。

先生は、2011年4月に放送大学の教授に就任された。しかし、その前から放送大学の客員教授というかたちで、2年間ゼミ指導にかかわってきた。したがって、放送大学のゼミとしてみると、小倉ゼミは2012年度で4年目になる。また、放送大学にかかわった最初の年である2009年度は、河合明宜先生と合同ゼミのかたちでやっていた。(ゼミ1期生を担当)。その後、2010年度は、客員教授のままでゼミ1期生とゼミ2期生を受け持った。論文指導ゼミも、河合先生のゼミとは別個に独立したかたちで行うようになった。

先生は、放送大学教授に就任する前は福井県立大学大学院で長く社会人向けのビジネス教育に携わってきた。この関係もあり、現場調査やフィールドワークを重視する研究スタイルをとってきた。放送大学における教育にかかわってからも、通信教育の枠内で現場に赴いて体感的に学ぶ途はないかと模索してきた。こうした流れの中で、客員教授のときから学生と共に現場に行き、そこで実施した調査活動の成果を調査報告書にまとめてきた。具体的には、企業調査や商店街調査、まちづくり・産業政策調査を実行し、それらの一部は調査報告書のかたちに仕上げてきた。

これらの活動と成果が一定程度まとまったのは2011年度末である。この時期までに、ゼミ授業の実況中継DVDの制作、ゼミホームページの開設、大阪調査ツアーと合宿研究会報告書の刊行、ゼミ教材の『論文づくりの方法論』の刊行、面接授業で行ったケース授業の報告書刊行などが行われた。これらはゼミ活動を第三者や外部から見えるものにし、そのイメージをつかみやすくする。ゼミ活動を年々発展させていく上では、こうした「ブツ」の存在が与って大きい。なお、ここでいうブツとは、刑事用語を借りたものであるが、モノのかたちでゼミ活動をわかりやすく外部に示す役割をするものである。

### 3. 学びと論文づくりをどうつなげるか

小倉先生の講義

次は、小倉先生の講義のうちで、放送大学において学ぶことをどう位置づけるか。また、そこでの学びと論文づくりをどうつなげるかという話題に絞り、整理した。これは以下のような内容となる。

#### (1) 放送大学のゼミで学ぶ意味を見直す

放送大学は通信制の大学であり、それを選んだ学生にとって自分の時間的都合と自分のペースで学べる点では都合がよい。しかし、授業内容の受け手への浸透でいえば、放送授業というメディアの性格からして、一方通行にならざるを得ない問題をもともと抱えている。たとえば、放送大学の授業科目はたくさんある。しかし、大学院のゼミも含め、放送大学の授業では、表面的で概括的なことを教えるだけであり、学生はそれを聞くだけの存在になりやすい。学生と教員を交えた相互方向的な場で、お互いの切磋琢磨を通じて、体得的なスキルを学ぶ。あるいは、自覚的な気づきにより、体得的な学びの成果を得る機会がきわめて乏しい。実際、時間的その他の条件に阻まれるため、学生同士が自らの課題解決のため、切磋琢磨するという状況になりにくい。これでは、たとえささやかながらという条件をつけても、ゼミ生が研究的アウトプットを生み出す環境にならない。

では、こうした通信教育に伴う制約条件は認めつつも、放送大学で学ぶことを生かすに

はどうすればよいか。それは、これまで常識的に受けとめられてきた学びの方法を徹底的に見直すことである。ごくささやかなところからいえば、放送大学での学びの価値を自分の時間的都合や自分のやり方が自在に貫けるとところに置かないようにする。そうではなく、社会においてプロフェッショナルな仕事人であるための力をつけることに置く。たとえば、修士論文であれば、プロフェッショナルな仕事人であることの証明書としてとらえる。ゼミにおける宿題とそれにまつわる課業は、そのための力をつけることにあるとする。そうであれば、通信教育の自由度や履修条件の実質的な緩さも、すべて実質的な力をつけるための底上げ的条件としてとらえていくのがよい。

## (2) 「一流でなくても、一流を目指そう」

「一流でなくても、一流を目指そう」は、小倉ゼミの基調の一つである。これは小倉先生が親しい小西滋人教授（金沢星稜大学および北陸大学元教授）のゼミスローガンの一つであり、ここから拝借したものである。

これは放送大学の大学院（論文指導ゼミ）のようなところに置くと、まことにふさわしいスローガンになる。なぜなら、放送大学の大学院は、大学院といっても研究の実体があるかどうかの点でまことにおぼつかない。まして、論文を書くための初歩的な前提条件をどの程度満たしているかになると、なおさら疑わしい。ところが、大学としては、そうしたことにまったく顧慮していない。たとえば、形式的な修士修了は、レポート提出の進捗要件である「レポートⅠ、Ⅱ、Ⅲ」を期限内に出しさえすればよいからだ。

では、このような学びの実体が希薄なところで、大学院と大学院生の実質を多少でも打ち出すには、どうすればよいか。これには、大学院生にふさわしいアウトプットをゼミ生に課すことが手がかりになる。つまり、通信教育の社会人であっても、研究と論文に欠かせない本質的要素は、当然入れ込んだ上で成果を出してもらうようにする。これは「一流でなくても、一流を目指す」ことからしか、生まれ得ないものである。そうであれば、小倉ゼミは、ゼミに実体をもたらそうとするのであるから、そのゼミ生は、「一流でなくても、一流を目指さざるを得ない」ことになる。

なお、この後の報告原稿では、論文づくりと起承転結の問題にふれた項があった。しかし、これは紙面の関係で割愛した。この部分に関心のあるゼミ生は、杉山まで連絡されたい。

## 4. 大量な情報を、時間をかけずに、正確に読みとる方法 小倉先生の講義

論文を書く上では、多くの先行研究や論文資料にあたり、大量な情報を正確に読みとり、位置づけていく必要がある。一方、今日の時代環境の下では、多くの業務が大量な情報に取り囲まれるようになってきている。そこで、一般の仕事においても、大量な情報を、時間をかけずに、正確に読みとることは喫緊の課題になる。つまり、現代の多くの職業人にとって、この課題を解決することが必須といえる。

そこで、この課題の性格についてももう少し立ち入ってみることにする。まず、こうした能力をとりわけ必要とする職業や地位はどのようなものであるか考えてみよう。この典型は、政府や大組織のトップである。たとえば、震災や原発事故に対応する総理大臣の場合

はどうか。彼は、多くの情報を、瞬時に処理して対応する必要がある。この多くの情報には不確かなものも含む。しかも、得られた情報だけが案件を検討する上で必要なものすべてであるとは限らない。また、すべての情報に目を通す時間的余裕はないが、重要な情報を見落としてはならない。彼は、こうした制約された状況とそれに基づく厳しい条件の下で判断しなければならない。同様な構造は、多少かたちを変えて企業のトップにもあてはまる。会社の行く末を判断するには、「大量の情報を、時間をかけずに、正確に読みとる」必要がある。では、これはどうすれば可能になるか。

大量な情報は、すべてを同列に扱っては処理できない。まず目を通して読むべき情報をスクリーニングしなければならない。読むべき情報と読まずに捨てる情報を第1次的に分ける。この読むべき情報と読まずに捨てる情報の取捨選択は、当然、トップであっても自分で行わないといけない。そうすると、この基準を何に置くかが問題になってくる。これは資料や文章を素早く読みとるやり方にも応用できる。こうした読みとりの方法としては、以下のようなことがあげられる。

- ①読むべき対象は重点志向で選びとる
- ②このため、読みとりの目的を明確化する
- ③読みとる対象の全体像を描いてから読む
- ④問題対象の構造を意識して読む
- ⑤問題やテーマに関する枠組みを背後に持って読む
- ⑥問いや問いかけを持ち、読みとる対象と問答しながら読む
- ⑦対象を一望して映像的に見る。一覽的に眺め、映像的に読みとる
- ⑧俯瞰的に見て、俯瞰的に内容を読みとる
- ⑨目次や見出しの意味を読みとる
- ⑩基本単位の初めと終わりの部分に注目して読みとる
- ⑪各単位部分の初めと終わり部分に注目して読みとる
- ⑫読み進めながら、読むべき対象はさらに絞り込む

#### 5. 4月以降のゼミの流れを整理する

次に、4月以降のゼミの流れを整理した。これは、昨日5月26日(土)の第3ゼミでも行った。そこでは先生が講義をした。今回は、杉山が5月第3ゼミにも出席し、先生が行われた4月以降のゼミの流れの整理作業を体験していることから、司会進行役として指名を受けた。そこで、杉山の司会進行役により、4月以降のゼミの流れの整理に入っていた。杉山からの質問にゼミ生が各回で何をやったか答えていくかたちである。しかし、ゼミの流れを整理するという点からいえば、このやりとりも外れることが多く、うまくいかなかった。

なお、この4月以降のゼミの流れの報告内容については、前日5月26日の5月第3ゼミ報告とは別個のかたちでまとめた。ただ、ここでは報告が長くなるため割愛した。この部分に関心のある人には、別途原稿を提供するので、杉山まで申し出てほしい。

## 6. まとめのグループ討議および一人一言発言

小倉ゼミでは、毎回のゼミの終わりに今日のゼミ内容のまとめ作業を行っている。今回からは、出席者が個別にまとめの発表を一言発言で行う前に、今日のゼミを理解するためのグループ討議が設けられた。ゼミ生の一言発言はこの後で行った。ただ、初回であることと時間的な制約から、グループ討議もゼミの内容のまとめに十分役立ったとはいえない。そこで、ここでは各ゼミ生の一言発言のみを紹介しておく。これは、次のとおりである。

<杉山一郎>

初めてホワイトボードの前に立ち、他のゼミ生に対してゼミの流れに関する講義を行った。自分でやってみると、これが大変な作業であることがよくわかった。4月からのゼミの流れは、前日の先生の講義で聞いていた。しかし、それを他のゼミ生に伝えるには、2つの能力が必要になると思う。1つは、「全体をつかむ」能力である。先生の講義の内容を伝えるには、まずそのあらましでも理解できていなくてはならない。「全体をつかむ」能力とは、小倉ゼミ流に言えば、「みる、きく、よむ」能力の身体化といえるのではないか。2つめは、「説明する」能力である。これも小倉ゼミ流にいうと、「はなす、かく」能力の身体化といってよいだろう。こうした能力をゼミで身につける必要がある。このことをあらためて痛感した。

今回の私の講義は、先生の助け船を得ながら、なんとか終えたという状態である。それでも、実践してみることで気づくことは多い。たとえば、説明する場合にも、ゼミ生にとって理解しやすいように話さないといけない。また、説明する対象はその全体をよく把握していないといけない。それから、時間を考え、話しは適切な長さに納める必要もある。

<梅津泰宏>

小倉ゼミでは、いつも何かの気づきや発見がある。ただ、気づきや発見があるかどうかは、ゼミ生がゼミに臨む姿勢にも関係してくるように思う。

各ゼミ生には、仕事があり、家庭がある。しかも、遠距離学生の場合は、距離の距たりや費用的負担の問題がある。ゼミに専心できない理由をあげれば、これだけでも十分すぎるくらいである。しかし、こうしたことだけいっていたら、何の進歩もない。社会人学生には、自分たちを取りまく制約条件に負けない能動的な姿勢が必要である。そこで、ゼミの中身をゼミ生自らが引き上げようとするのが大事になると考える。われわれは、少なくとも何かの縁があって小倉ゼミで出会った。この縁を大事にし、より意味あるゼミにするよう力を出し合いたい。ゼミ活性化のため、各ゼミ生からの積極的な提案を俟ちたい。

<藤原秀一>

4月以降のゼミの流れを振り返ることにより、自分が置かれた客観的状況を再確認できた。自分の場合は、論文を書く上での基礎力の不足を痛感する。当面まず構成の基本スキルを身につける必要があると思う。これは構成ができないと、論文を書くことへの入口にも入れないからである。



<佐藤健雄>

ゼミ生が4月以降のゼミの中身を十分に消化できていない現実が明らかになった。自分としては、構造化というキーワードに注目したい。資料の読みとりにおいても、対象を構造化すると素早く内容を読みとれるという。こうしたことを積み重ねれば、大量の情報を、時間をかけずに、読みとれると教わった。地道な実践を日々に積み重ねて、構造化ができるようにしてゆきたい。